An analysis of students’ reports on the course "Basic Nursing Practice I", no. 2: Learning outcomes related to qualities requisite for the nursing profession

Tomomi Tsujino*, Tomoko Yamaguchi*, Noriko Ueno*, Takumi Ogata* and Masako Yano*

* Aino University

Abstract

The purpose of this study is to examine how students acquire qualities requisite for the nursing profession through basic nursing practice. We have analyzed the reports submitted by 57 students. As a result, 153 codes have been extracted and classified into 5 categories: "skillfulness", "emotionality", "relationships", "autonomy" and "others". Since the objective of this training is to communicate with patients, students have learned a lot of things about "relationships" and "emotionality". Through this training, students have actually engaged in medical services and interacted with patients. This is not a type of learning experienced through lectures. Based on the report contents, we suggest that this training, through direct experience of nursing, has provided students with an opportunity of reflecting how successful their relationships have been.

Key words: qualities requisite for nursing profession in nursing students, the early exposure, nursing students, basic nursing education
初回基礎看護学実習レポートの分析（その 2）
——看護職者としての資質に関連した学び——

辻野朋美*, 山口智子*, 上野範子*
緒方巧*, 矢野正子*

【要 旨】 本研究の目的は、学生が初回基礎看護学実習のどのような経験から、看護職者として必要な資質を身に付けていくのかを明らかにすることである。

57 名の基礎看護学実習終了後に記載したレポートの内容を分析した。その結果、153 個の学びが抽出され、【技能性】、【情緒性】、【関係性】、【主体性】、【その他】の 5 個のカテゴリーに分類された。本実習が受け持ち患者とのコミュニケーションを主体とした実習であったため、【関係性】や【情緒性】に関する学びが多かった。

本実習で、実際に患者と関わり、医療の現場に身を置くことによって経験したことは、譲義では得られない経験である。初めて看護という職業に触れて、自らの関係性のありようを振り返る機会となっていたことが記述内容から推測された。

キーワード：看護職者としての資質、早期体験学習、看護学生、看護基礎教育

I は じ め に

患者の権利意識の向上や医療サービスへの要望の変化、福祉・介護を含む医療体制の変革など、わが国の医療を取り巻く社会の状況は著しく変化している。より安全で質の高い医療・看護への要請から、看護学の人材育成における国民のニーズや期待は高まっているといえよう。これらの要請に対応すべく、看護基礎教育は、豊かな人間性を兼ね備えた資質の高い看護職者の育成が問われている。看護を生涯教育ととらえるならば、看護基礎教育は、看護職の資格を得るための教育ではなく、将来変化する看護の役割を引き受け、看護の本質を追及していくような基礎的能耐を引き出すことであろう。したがって、看護基礎教育においては、将来の看護の発展に寄与することのできる、看護職者に求められる資質の育成を目指し教育活動を行っていくことが望ましい。そのためにも、各大学において、教育全般の質の向上や学生の学習成果の向上を目的に、教育方法を検討し、評価、適応させていくことは非常に重要である。

我々は、2005年に看護職者になりたいと考えられる能力を評価する指標として、【技能性】、【情緒性】、【主体性】、【関係性】の 4つのカテゴリーで構成された「看護学の看護職者としての資質」の調査票を作成した[1]。この調査票を用いて、基礎看護学実習や学年修了時に、学生の自己評価を総合的に行ってきた。そして、調査結果をもとに、講義・演習の方法や基礎看護学実習の目標や内容等を検討してきた。

* 辻野大学
これまでの調査で、1年生を対象にした調査項目全体の平均値が高いことを報告した。その中でも、【情緒性】に関する項目は、看護者として人間を捉える時の自分の情緒的反応や対応などを含んでおり、【関係性】に関する項目は、他人との関係を保つためのコミュニケーションスキルやリーダーシップ、メンバーシップなどの組織活動の役割を含んでいる。この【情緒性】と【関係性】の平均値が1年生評価に高く、要因を早期体験学習（Early Exposure）として1年次の7月に1週間実施した。基礎看護学実習1の効果が示唆された。

しかし、我々がこれまで実施してきた質問紙調査では、学生が基礎看護学における講義・演習、実習のどのような場面でのどのような経験・体験から、看護職者として必要な知識を獲得していくのかを明確にできなかった。前述した研究の中で学生の体験を質的に検討し、明らかにしていく重要性を述べてきた。

以上の研究背景をふまえて、本研究では、基礎看護学実習後に記載するレポートを分析し、どのような場面でのどのような経験・体験から「看護学の基礎看護職者としての資質」に関連する学びを得ているのか質的に分析し、明らかにすること、また、早期体験実習の効果について検討したのでここに報告する。

### Ⅱ 研究目的

基礎看護学実習後に記載するレポートを分析し、どのような場面で「看護学の基礎看護職者としての資質」に関連する学びを得ているのかを明らかにする。

### Ⅲ 研究方法

1. 研究対象
   1）研究対象
   関西圏内にある看護学大学の基礎看護学実習1を履修した1年生のうち、課題レポートを研究に使用することに了解した学生
   2）分析対象
   実習終了後に記載する課題レポート（以下レポートとする）
   課題レポートとは、実習目的・目標・行動目標に照らし合わせながら、実習中に学んだ中でテーマをあげ、学びの内容・評価・考察・まとめ等を記載したものである。
   3）対象学生が履修した基礎看護学実習1の内容（表1）

<table>
<thead>
<tr>
<th>表1</th>
<th>対象学生が履修した基礎看護学実習1の内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>【目的】</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1）対象者に対して適切な医療・療養生活を提供するという観点から、病院の場における位置づけと役割、病院組織・機能、看護師の役割を知る</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2）健康障害を持ち入院生活を送っている対象者の理解と、相手を尊重した態度で日常生活の援助を行う</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>【目標】</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1）病院の機能・役割を知る</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2）対象者のおくれている病室、病床環境を理解できる</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>3）対象者及び看護師のコミュニケーションをとることができる</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>4）対象者の生活行動の変化を知る</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5）バイタルサインの把握が可能</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>6）実際に行われている日常生活援助の必要性や方法、その援助の科学的根拠を知る</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>7）看護師に報告し、記録することができる</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>8）看護師の役割を知る</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>【内容】</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1）実習単位：1単位（45時間）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2）実習期間：2006年7月10日（月）〜7月14日（金）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>7月12日（水）は学内実習</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

4）対象学生の基礎看護学実習1履修時のレジネス（表2） |

2. 分析方法

1）分析方法
レポートの内容を、「看護学の基礎看護職者としての資質」に関連した学びの観点から読み、一つの学びが含まれる1文を抽出した。抽出したデータを、「看護学の基礎看護職者としての資質」の項目ごとに分類し分析した。分析内容の信頼性・妥当性を確保するため、共同研究者間の同意が得られるまで検討を繰り返した。

2）「看護学の基礎看護職者としての資質」の調査票について（図1）

2004年7月に看護学大学1年生に実施した、「看護職者に必要な資質」の自由記述の内容分析を行い、得られた411のキーワードを、K-J法を用いて分類した。分類した411のキーワードを、技能性、情動性、主観性、関係性の4つのカテゴリーに分類し、看護学教育のあり方に関する検討会報告書⑼や看護学の資質に関する先行研究⑩、看護職者のイメージに関する先行研究⑪、看護学教育の評価に関する文献⑫などを参考にし、54の資質項目から構成された無記名自記式の調査票を作成した。

この調査票の回答は、学びの自己評価であり、学びの現在の到達度を自身の視点に基づいて評価した結果である。回答方法を自己評価にしたのでは、自己評価が、自身の学業、行動、性格、態度などを評価
表2 対象学生の基礎看護学実習1履修時のレディネス（ ）内は単位数

<table>
<thead>
<tr>
<th>必修科目</th>
<th>選択科目</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>履修進行中</td>
<td>履修終了</td>
</tr>
<tr>
<td>基礎知識</td>
<td>基礎知識</td>
</tr>
<tr>
<td>健康科学（2）</td>
<td>日本語I（1）</td>
</tr>
<tr>
<td>生化学（2）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>英語I（1）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>心理学（1）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>社会生活と法律（1）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>保健学総論（1）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>医療保健学I（1）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>専門知識</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>基礎看護の方法I（1）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>對象の理解I（1）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>看護の基礎（2）</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

基礎看護の方法I：実習履修時の終了単元
○ コミュニケーション
○ 視察・情報収集・記録・報告
○ バイタルサイン（体温・呼吸・脈拍・血圧）
○ 環境（基本ベッドの作成）
○ 安全・安全
○ ボディメカニクス

図1 看護実習の看護職者としての資質の構成

し、そこから得た知見によって自らを確認し、今後の学習や行動を改善、調整する目的的、自律的な機能を持つと考えたためである。

3．倫理的配慮
本研究は、大学の研究倫理委員会の承認を得て実施した。成績評価終了後に、本研究の趣旨と、研究への協力は自由意志であること、研究協力の有無と成績とは何ら関係がないこと、また研究以外にデータは使用しないこと、データは研究者によって厳重に保管し、データ処理が終了次第処分することを口頭と書面で説明した。

レポートの匿名性を保護するため、次の手順でレポートを回収した。実習ファイル返却の際に原稿のレポートをコピーしたレポートを返却し、研究に同意する場合は、コピーしたレポートの氏名記載部分を切り取り、封筒に入れて提出するようにお願いした。同意の得られなかった場合には無記名の封筒のみを回収した。
IV 結 果

基礎看護学実習Ⅰを履修した1年生89名中57名から、本研究への同意を得た。レポートの内容を分析した結果、153個の学びが抽出された。それらの学びは、「看護学生の看護職者としての資質」の【技能性】、【情緒性】、【関係性】、【主体性】、【その他】の5つのカテゴリー、33のサブカテゴリーで構成されていた。（表3）

文中では、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを[ ]の記号を用いて示した。

1.【技能性】に関する学び

【技能性】のカテゴリーは、安全・安楽を考慮した看護技術を行うために必要な知識や技術に関連した学びである。実習洗髪時点での既習科目も限られており、バイタルサインの測定や環境設備の技術に関連した学びであった。

【看護援助の目的を理解する】、【看護援助を実施する前に十分説明を行う】、【看護援助を実施する必要性を理解する】、【看護援助実施後に報告する】、【身体状況を考慮して看護援助を行う】、【看護援助の手続きを沿い行う】、【プライバシーを考慮して看護援助を行う】の7つのサブカテゴリー、16の学びで構成された。

以下に代表的なサブカテゴリーとデータを示す。

【看護援助の目的を理解する】
実習の始めはバイタルサインの測定をすることで

精一杯になってしまった。次は患者様の身体のことばかりに気をいわせてしまい、環境のことが無関心になってしまった。徐々に観察ができるようになり、バイタルサインという生命の兆候を把握するために行う「観察」というのは、患者様の状態をよりよく知るための手段なのだということ分かった。

【看護援助を実施する前に十分説明を行う】
自分が分かっていればそれでいいのではなく、患者さんが分かっていなかったら不安になり測定値も変わってしまうと思う。患者さん一人一人に合わせて、その人に分かりやすく説明することが大切である。

【看護援助実施後に報告する】
実習2日目の火曜日。患者のふらつきが強く、左側に倒れててしまうという状況を私は認識が甘くただ単に疑っているだけだったと思った。（異常に気づいた看護師の対応を後で聞く）自分の観察がいかに不十分であるかということ、観察した内容を担当の看護師の方に報告することの重要さがわかった。

2.【情緒性】に関する学び

【情緒性】のカテゴリーは、人と接するときの、自らの情緒的反応や対応に関連した学びである。

【笑顔で明るく振舞う】、【相手に自分の心を開く】、【愛情を持って相手と接する】、【相手から親しみをもたれるように意識する】、【冷静に物事を考え】の5


<table>
<thead>
<tr>
<th>表3</th>
<th>初回看護学実習で学んだ「看護学生の看護職者としての資質」</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>カテゴリー</td>
<td>サブカテゴリー：33 （ ）学びの数</td>
</tr>
<tr>
<td>1. 技能性</td>
<td>看護援助の目的を理解する（5） 看護援助を実施する前に十分説明を行う（4） 看護援助を実施する必要性を理解する（2） 看護援助実施後に報告する（2） 身体状況を考慮して看護援助を行う（1） 看護技術の原理原則に沿い行う（1） プライバシーを考慮して看護援助を行う（1）</td>
</tr>
<tr>
<td>2. 情緒性</td>
<td>笑顔で明るく振舞う（6） 相手に自分の心を開く（6） 愛情を持って相手と接する（2） 相手から親しみをもたれるように意識する（2） 冷静に物事を考え（1）</td>
</tr>
<tr>
<td>3. 関係性</td>
<td>信頼関係を築く努力をする（18） 相手の立場に立って物事を考える（13） 相手があなたをコミュニケーションを行ない（13） 恩人話の話や共感を持って聴く（12） 相手に対しての配慮や配慮をする（5） 表情や声調や手振りを使って相手に反応をする（5） 相手に敬意を持たせる（5） 看護学生としての自分の役割を理解する（5） 相手に対する敬意を持つ（5） 相手が好感を持てるような対応をする（2） グループで共通の課題を見出す（1） グループメンバーと協調する（1） 相手を信頼する（1） 相手の価値やつながりを考え入れて（1）</td>
</tr>
<tr>
<td>4. 主体性</td>
<td>疑問や課題を発見し、解決に向けて取り組む（1）</td>
</tr>
<tr>
<td>5. その他</td>
<td>会話だけがコミュニケーションではない（9） 相手に関心を示す（7） 相手に安心感を与える（6） 一人ひとりに合わせたコミュニケーションをとる（6） 常に疑問を持つ（4） 患者に対する感謝の気持ちを持つ（3）</td>
</tr>
</tbody>
</table>

- 27 -
個のサブカテゴリー、17 個の学びで構成された。以下に代表的なサブカテゴリーとデータを示す。

【笑顔で明るく振舞う】
患者さんの顔の音を聴いたために聴診をしたが、一人では音が聞き取れず患者さんを不安にさせるような表情をしてしまった。そのとき患者さんの顔が変わったことが印象に残っている。自分の表情で患者さんは不安にさせてしまったのだと思った。

【相手に自分の心を開く】
自分の心を聞いて話し、また患者さんの言葉に耳を傾け、相手に関心を持って接することによって相手に心を開いてもらえる。信頼関係を築くうえで最も重要なことだ。

【愛情を持って相手と接する】
「患者を理解する」ことは、「患者に心を開き、患者を好きになることで、患者の立場に立つ」ということだ。

【相手から親しみをもたれるような意識する】
大きな声で挨拶もはっきり言うように心掛けた。担当の患者さんばかりでなく、他の患者さんにも笑顔で挨拶をした。

【関係性】に関する学び
【関係性】に関する学びは、他者との関係性を持つためのコミュニケーションスキルや、組織で活動するためのリーダーシップやメンバーシップ、社会や家族の一員・学生としての役割に関連した学びである。実習目標・目的・評価も対象者のコミュニケーションに重点を置いて、抽出された学びが最も多いカテゴリーであった。

【信頼関係を築く努力をする】、【相手の立場に立って物事を考える】、【相手にあわせたコミュニケーションを行う】、【相手の話に共感を持って聴く】、【相手に対しての感情管理・配慮を行う】、【表情や身振り手振りを使って相手に反応する】、【相手を尊重した態度】、【看護学生としての自分の役割を理解する】、【相手に対する謙虚な気持ちを持てる】、【相手が好意を持てるような対応をする】、【グループでの共通の課題を見出す】、【グループメンバーと協調する】、【相手を信頼する】、【相手の価値があるか否かを受け入れて聴く】の14個のサブカテゴリー、84個の学びで構成された。

以下に代表的なサブカテゴリーとデータを示す。

【信頼関係を築く努力をする】
話すタイミングが分からなかったり、話しかけても目標が合わなかったり、なかなか話しかけられず、話の流れを見ていることが多かった。きっと、患者さんを避けて逃げていたのだろう。そんな時に、師匠さんに「だれも相手が合っていかなかったとしても、話しかけたら返事をしてくれるということはあなたのお話を聞いていているということ。あなたが思っている会話のベース、方法が患者さんには合っていない。相手にベース、方法を合わせてみましょう。」とアドバイスをいただいた。自分がコミュニケーションについて相手のことを何も考えていないのだと気づいた。

【相手の立場に立って物事を考える】
私は会話中に患者さんを観察していて目に気のないことが気になっていたので、患者さんの目がいきいきとするような援助を考えることにした。その援助を考える際、患者さんを自分におきかえて私だったらこの状況の中でどんな援助をしてほしいかと考え、まずは実行したことは外に散歩に行き、気分転換をしていたことだった。

【相手にあわせたコミュニケーションを行う】
一つ一つの動作をする前の「これからどうなるのか」の説明に対して、患者さんははっきりやすい表現にはうなずき、(血圧測定時の)「加圧・減圧」という難しい医療用語には表情が変わったことから、患者さんは私たち看護師の説明・話を理解してくれていることが分かった。このことから患者さんに対してわかりやすい表現でコミュニケーションをとる必要性を学んだ。

【相手の話に共感を持って聴く】
バイタルサインの測定や、自分のことを知ってもらうことで一杯一杯で、実習最終日も実技的なことをしっかりこなすことに集中していた。すると患者さんがいきなり泣きだされた。「息子に迷惑をかけている」「糖尿病だから好きなもの食べられない」「足が自由にならない」そして最後に「生きているのがつらい」とおっしゃった。4日間私が一番そばにいて、いろんなことを話ししたり行動したりしていたのに何もわかっていないのと感じた。しかし、
ただそれでは話の流れを最後まで続き、辛いよねって同感
し、気持を受けて止め、手を振ったとすると、そのよ
うなことが患者さんの支えになるということを感じ
した。

【相手に対しての気配りや配慮を行う】

私は「コミュニケーション」とは話を相手を
知ることだと思っていてが、相手のことを思いやり
考えながらすることがコミュニケーションであり、
会話だけではなく絵を描いたり、手を動かしたり、
表情で相手を理解したり方法はいろいろあると思
う。それが、患者さんに合うのか合わないのかを考え
ることが一番大切なのだだと感じた。

【表情や身振り手振りを使って相手に反応する】

言葉を発さなくなても感情や表情でお互いに分かり
合えれば、十分コミュニケーションを図れるということ
を学んだ。

【相手を尊重した態度】

病気の知識においてさらに人生の経験においても
未熟な学生看護師であるが、患者さんの気持ちを考えな
ければならないということを学んだ。

【看護学生としての自分の役割を理解する】

患者さんは、私たちの教科書である。患者さんの
体を通して、私たちは学ばせていただいているのだ
から「ありがとう」という感謝の気持ちを忘れては
いられない。また、学んだことを次にいかすことが、
患者さんへの一歩の恩返しになるということを学ん
dった。

【相手に対する謙虚な気持ちを持つ】

コミュニケーションの大切さを直接患者さんから
教えていただき、学ばせてもらった。これからどん
な時も患者さんに対して、謙虚な心を忘れず、感謝
の気持ちを持って接していきたい。

【相手が好感を持てるような対応をする】

話を聞いて共感したり笑顔で接するなど、患者さ
んが一緒に行っていやすい気持ちにさせないように、
表情や動作など小さな変化にも気づかなくてはいけ
ないと思った。

【グループメンバーと協調する】

グループで力を合わせて協力し合い、お互いのよ
いところを吸収していけた。

【相手の価値やあるかがままで受け入れて聴く】

相手がなぜそう話すのか関心を持って聴くことが
大切で、自分の主観的な意見は挾まずに患者の主張
を尊重して肯定も否定もせずに聴くことが大切だと
学んだ。

4. 【主体性】に関する学び

【主体性】のカテゴリーは、課題に対しての自己の
取り組みや、責任を自覚した行動、将来の目標への取
り組みに関連した学びである。

【疑問や課題を発見し、解決に向けて取り組む】の
1個のサブカテゴリー、1個の学びで構成された。

【疑問や課題を発見し、解決に向けて取り組む】

どんなことも理由があり、それには何かしら良
い意味が込められている。この良い意味に気づくた
めにも、常に周りの状況を見て、疑問を持って学ん
dていくことが大切である。

5. 【その他】に関する学び

【その他】のカテゴリーは、「看護学生の看護師と
しての資質」の4個のカテゴリーに含まれない学びで
ある。

【会話を促す】、【相手に関心を示す】、【相手に好感を持て
る】、【相手に関心を持て】、【相手の困難を理解する】、
【常に疑問を持つ】、【患者に対する感謝の気持ちを持つ】の6個
のサブカテゴリー、35個の学びで構成された。

以下に代表的なサブカテゴリーとデータを示す。

【会話を促す】

患者さんは話すことができないので、私は患者さ
んの意志が伝えられるように五十音の文字盤やイエ
スカーネで答えられる質問形式の文字盤を作った。
これを1日目に患者さんに見せるととても反応が良
く、口だけで何かを伝えようとしてくれるよう
になった。その結果4日目には、口ベクトを何を私に
伝えようとしているのかがわかるようになった。

【相手に関心を示す】

人とのかかわりを深く考えていく、コミュニケーション
ションについて全くわかっていなかったが、相手に
関心があるから、相手を知りたいために質問したり
会話したりするのだとわかった。

【相手に安心感を与える】

痛みというのは患者本人しかわからないものであ
る。痛みを訴えている患者に、安心感を与える事
が重要だと思った。

【一人ひとりに合わせたコミュニケーションをとる】

その患者さん一人一人にあったコミュニケーション
があり、一人ひとりの特徴を知り、その人にあっ
たコミュニケーションをとることが一番大切なんだ
と学んだ。

【常に疑問を持つ】

バイタルサインの測定やコミュニケーション、病
床環境の調整などを行ってきが、それはそのものが
大切なのであるが、そこから「何をどのようにすべ
きか、どうしてそのような援助をするのか」と、常
に疑問を持って行動していくことが、一番看護師に
求められるものなのだと言ってんだ。

【患者に対する感謝の気持ちを持つ】

毎日のカンファレンスの中で学んだことは、患者
さんは、私たちの教科書であるということである。
患者さんの体を通して、私たちは学ばせていただい
ているのだから「ありがとう」という感謝の気持ち
を忘れずに学んだことを次にいかすことが、私たちか
ら患者さんへの一番の恩返しになるということを学
んだ。

V 考 察

1. 「看護学生の看護職者としての資質」に関連した
学びの内容について

1)【技能性】の学びについて

基礎看護学実習1履修時点での、基礎看護学の終了
単元は、コミュニケーション、観察・情報収集・記
録・報告、バイタルサイン、環境、安全・安楽、ポ
ディメカニクスの6単元である。実習期間中実際に学
生が実施した技術項目は、バイタルサインの測定、環
境整備、基本ベッドの作成であり、抽出されたサブカ
テゴリーも、これらの技術項目を実施して学んだ内容
であった。

サブカテゴリーのデータに、実習の始めはバイタ
ルサインの測定をすることで精一杯になってしまった。
次は患者様の身体のことはより気になり、環境のことが
無関心になってしまった［看護援助の目的を理解する］。「自分が分かっていた者でないい
のではなく、患者さんが分かっていなかったから不安に
なり測定値も変わってしまうと思う［看護援助を実施
する前に十分説明を行う］」とある。これらのデータ
は、はじめは緊張しながらも無我夢中でバイタルサ
インの測定や環境の調整を行っていたが、少しずつ看護
技術に自信が持て、看護師や教員の指導をもとに自分
自身の行動を客観的見られるようになり、得た学び
であると考えられる。

また、「実習2日目の火曜日、患者のふらつきが強
く、左側に倒れてしまいという状況を私は認識が
甘くて単に眠いので横になっているだけだった。
（異常に気づいた看護師の対応を後で聞き）自分の観
察がいかに不十分であるかということ、観察した内容
を担当の看護師の方に報告することの重要性がわっ
た［看護援助実施後に報告する］」というデータがあ
る。このデータの状況に看護師や教員の教育的介入が
あったかどうかをレポートから読み取ることはできな
かった。しかし、学生が看護師の患者への対応をモデ
ルとすることで、自身の行動を振り返り、観察や報告
の意味を理解しているといえる。

2)【情緒性】の学びについて

カテゴリー［笑顔で明るく振舞う］のデータで
「…聴診をしたが、一人では音がきき取れず患者さ
ん不安にさせるような表情をしてしまった。そのと
き患者さんの顔が変化したことが印象に残っている。
自分の表情で患者さん不安にさせてしまったのだと思
った」という記述がある。聴診をうまく行えなかった
ことで表出した学生自身の表情が、患者を不安にさ
せてしまったことを、患者の反応を通して振り返って
いる。

これらの、【情緒性】に関する学びは、受け持ち患
者や、他の患者との相互的な関わりから得た学びであ
るといえる。藤岡らは、相互性とは、「見る」「見られ
る」「与える」「受け取る」のように、関係の中
にある者が、相互に同時に相手を経験しているという
ことであると述べている。そしてこの相互性の経験を
可能にする1つの理由として看護者が経験に関かれて
いることを挙げており、その時に「ひと・もの・こ
と」とともにあり、それとともに変化することをして
いることであると述べている。従って、【情緒性】
が患者との相互性の中から得る学びであるとするなら、学生自験の柔軟な姿勢や感性をもって、経験に問
かれてきてることが重要であるといえよう。
3）【関係性】の学びについて
レポートの内容を、「看護学生の看護職者としての
資質」に関連した学びの観点から分析した結果。【関
係性】のサブカテゴリーが最も多かった。基礎看護学
実習１が、患者とのコミュニケーションを主とした実
習であるため、他者との関係性を保つコミュニケーション
スキルを含む【関係性】が最も多かった結果となっ
たと考える。
サブカテゴリー【信頼関係を築く努力をする】の
データでは、学生が「話すタイミングが分からなかったり、話し相手に関心がなくなり、なかなか
話しかれず、話しが流川で見られないことが多く
あったが、師匠先は「相手にベース、方法を合わせる」
というアドバイスをうけ、「相手のことを何も考え
ていないなかった」と自己分析的なコミュニケーション
を実体験してしまっていたことに気づいている。コミュニケーションは送り手と受信者との相互作用の中で、意
味を理解し互いに信頼関係を築き深めようという変化
プロセスであるというコミュニケーションの本来の
意味を、臨床の状況の中から理解しているという。
サブカテゴリー【相手の話を共感を持って聴く】の
データでは、「患者さんかいなり泣きさされた。「息子
に迷惑をかけている」「糖尿病だから好きなものが食
べられないう」「足が自由にならない」そして最後に
「生きているかのない」」と訴えられ、「4日間私が
一番そばにしていて、いろんなことを話したり行動したり
していたのに何をわからていなかった」と感じた。
しかし、ただそれだけ目を最後まで開き、言い表して共
感し、気持を受け止め、手を握り体をさらす。そのよ
うなことが患者さんの支えになれるということを実感し
た」と振り返っている。4日間の実習の中で自らの
課題をこなすことに集中していた学生が、患者の言動
により、自らのこれまでの間取りを振り返り、患者の
痛み・苦しみを理解できていなかったと反省している。
そして、苦悩する患者のまることを受け止め、患者に
寄り添い理解することの大切を学んでいる。共感性に
ついて、中西[13]は、他者の内面の世界を実感を自らの
実感として感じることができ、他者の痛み（体験的なも
ので限らない）に対する視覚であることであるという。
つまり、看護職者の自覚感は他者の言葉や動きの
意味を把握し、適切に看護援助として行為していく
ことが共感性であるともいえる。共感性は患者と看護
者間の関係形成の基本である。1年次7月という短期間の
実習にもかかわらず、学生は援助的関係性の構築に
おいて大変重要な学びを得ていることがわかる。
コミュニケーションスキルだけでなく、[相手を尊
重する態度]や[相手に対する謙虚な気持ちを持つ]
ことを学んでいた。さらに、「病気の知識においてさ
らに人生の経験においても未熟な学生に看護される患
者さんの気持ちを考えなければならない、患者さんは、
私たちの教科書である。患者さんの体を通して、私たち
は学ばせていただいたのだから「ありがとう」
という感謝の気持ちを忘れていけない」ということ
を学んでいた。これらは、患者への感謝の気持ちから、
看護学生として、学習者としての立場を再確認してい
る。また、「学んだことを次のいかすが、患者さ
んへの一歩の恩返しになるということを学んだ」、「コ
ミュニケーションの大切さを直接患者さんから教えて
いただき、学ばせてもらった。これからどんな時も患者
さんに対して、謙虚な心を忘れず、感謝の気持ちを
持って接していきたい」と述べているように、看護を
学ぶ意味をも見出している。このことは、今後看護を
学んでいく学生の、学習の動機づけにも繋がっている
といえよう。
4）【主体性】の学びについて
【主体性】は、課題に対しての自己の取り組みや、
責任を自覚した行動、将来の目標への取り組みに関連
した項目である。従って、学びを深め、自らの課題を
明らかにすることによって得ることができる学びである
tいえる。一部の学生の中には、実習での学びを自
己に引き付け、今後の課題発展させることができた
学生もいた。
5）【その他】のカテゴリーに含まれる学びについて
【その他】のカテゴリーは、「看護学生の看護職者と
しての資質」の4つのカテゴリーに含まれない学びで
ある。
本実習の実習施設は療養病棟や精神科病棟を含んで
いるため、学生は言語的コミュニケーションが十分に
とることがない患者を受け持つこともあった。そ
のため、[会話だけはコミュニケーションではない]
[一人ひとりに合わせたコミュニケーションをとる]
などのサブカテゴリーが抽出されたと考える。
また、[常に疑問を持つ]のデータに、「バイタルサ
インの測定やコミュニケーション、病床環境の整備な
どを行ってきたが、それぞれそのが大切であるのではなく、
そこから。「何をどのようにすべきか、どうしてそのよ
うな援助をするのか」と、常に疑問を持って行動して
2. 「看護学生の看護職者としての資質」に関連した
学びと早期体験学習について

早期体験学習の意義を、桜井、山口は、看護職に
魅力を感じ、専門的知識・技術はもちろんのこと、多
くの様々な経験を通じて豊かな人間性を形成することの必
要性を認識し、これからが学習意欲を高め、繋がっていると
述べている。また、効果として、看護職や対象者に直
接触れることから、養護訓練では得られない自分たちの体
験や観察と感性を通じて学ぶことの大切さを実感し
たと報告している。我々は、看護基礎教育の早期に
初回基礎看護学習実習を行うことは、学生の看護学を学ぶ
動機づけとして大きな意味を持つと考え実施してきた。
そして結果から、「関係性」のカテゴリーに、看護を
学ぶ動機付けの基盤となる、豊かな人間性を形成する
ことの重要性に関する学びを収穫取ることができた。

看護学実習では、学生、患者、指導者、教員、他の医
療従事者、患者の家族、実習グループの学生など、多
くの人々が関わることを必然とし、普段の教室での学
習スタイルからは想像超える人間関係が展開される
ことが多い。実習という教育の場で、学生は、多くの
他者と関わる中で自己を引き出し、自己の出を求められ、
自己観察を深めることを要求される場合も少なくない。

3. 2）【関係性】についての学びは、学生、患者、他の
医療従事者、対象者との関わりを通じて得られたもので
あった。

4. 3）【関係性】についての学びが最も多かった。1
年次7月という早期の実習にもかかわらず、生
薬の共感性などの援助的入院関係の構築におい
て大変重要な学びを獲得していたことがわかった。
また、コミュニケーションスキルだけでなく、
患者と対話する能力や、患者に対する尊重
な気持ちを持つことを学んでいた。

5. 4）【主体性】について、一部の学生の中には、実
習での学びを自己で引き受け、今後の課題へと
展開することが出来た学生もいた。

6. 5）【その他】は、実習実施の特徴を示した学びが
あった。
3. 「看護学生の看護職者としての資質」に関連した学びと早期体験学習について

初めて看護という職業に触れた後、その現場に身を置きながら体験することによって得た学びであるため、自らの関係性のあり方を振り返る機会となったことが、関係性に関する学びが圧倒的に多かった一つの要因であることが示唆された。

謝辞

本研究を行うにあたり、調査を快く受けてご協力顶きました学生の皆様に心からお礼と感謝を申し上げます。

本論文の要旨は日本看護学教育学会第17回学術集会（福岡）において報告した。

文献

1) 沼野朋美、上野敬之、権利彰子、山口孝子、矢野正子、看護学生の看護職者としての資質に関する研究、看護学院紀要2005；19：80-8。
2) 看護学教育の在り方に関する検討会 報告：大学における看護実践能力の育成の実状に向けて、平成14年3月26日
3) 看護学教育の在り方に関する検討会 報告：看護実践能力育成に充実した大学卒業時の到達目標、平成16年3月26日
4) 河合芳子、任和子、看護婦に求められる資質——一般人、医師、看護婦、看護教師への意識調査を踏

まえて——日本看護師会学術雑誌2000；2（1）：9-15。
5) 米田昌代、佐々木栄子、溝内隆子、松下妙子、中山栄純、津田秋子、看護学生の看護職イメージに関する研究 [第1報] —— 1大1回生1年次に焦点を当てて—,—看護展望2003；28（10）：86-91。
6) 米田昌代、佐々木栄子、中山栄純、金井美幸、田村幸恵、溝内隆子、松下妙子、川島和代、津田秋子、看護学生の看護職イメージに関する研究 [第2報] —— 自己効力感との関連に焦点を当てて—,—看護展望2003；28（10）：92-8。
7) 岸本淳子、野尻雅美、中野正孝、杉山柳子、酒井郁子：看護学生の看護師イメージ 大学生と短大生の比較、看護教育1994；35（6）：427-33。
8) 田島純子：看護教育評価の基礎と実際 東京医学書院；1989
9) 舟田宏之、杉森みどり、看護学教育評価論 東京、文光堂；2000、p.11-2。
10) 藤田昭治、安藤史子、村田さおり、中津川順子、学生とともに学ぶ臨床実習指導ワークブック第2版 東京、医学書院；2001、p.49-50。
11) 増田佳子、吉井美穂、坪田恵子、臨床実習前ロールプレイングで高めるコミュニケーション力—看護師・患者・観察者役になった学生の気づき—,看護展望2005；30（12）：21-6。
12) 中西矢子、臨床教育論 東京、ゆみる出版；1985、p.49
13) 前川10）p.3
14) 桜井礼子、山口真由美、看護教育における初期体験実習の経験と意味、大学看護科学研究1999；1（1）：20-6。